

【現代語版】

長唄 木花之開耶姫 桜の誓い

（フロッグ）

随分と遠い昔に、我らは地球に人間の祖先を創った。億万の実験をやつと成功させて、地上に八種の人間の祖を生み出した。

基本的な人体は同じではあるが、太陽光が生存に影響を及ぼすことを考慮して、人体を包む肌の色は黒、赤、黄、白に分け、それに男と女という

二つの性を結合することによって知性の成長と人類の繁栄が進むようにした。

こうして創造した八種の人間を複製して大陸各地に配置した。やがて男女の愛によって彼らは生み広がり、地上の人口が増えていった。

我らはそれから億年の時を待って、大陸各地に文明が育ったか見届ける。

先ず、最初に人間の祖を創った、あの豊かな島を中心に行つてみよう。

ここは火山が大爆発をしそうだったので、それを鎮めてから人間を配置したのだが、今ではその麓には豊かに稲穂が育っているではないか。

日本列島で創造した生命の系統樹は大いに栄えている

太古の昔に降り立った富士山の裾野に再び訪ね来ったぞ。

（木高の国）
日本各地を巡回していた瓊瓊杵尊には、国を統治するための開墾技術と智慧を持つておられました。瓊瓊杵尊が今の富士山と呼ばれる高い山腹に登って見渡して見ると、下界には広々とした平野があり、その先には港が作れる豊かな海が広がって、とても美しい景色でした。そこで、

「そうだ、ここを富士の国として開拓してゆこう」と、瓊瓊杵尊は決意を固めるのです。

瓊瓊杵尊は大君として富士の国を統治していたのですが、各地の巡幸の旅を経て、この地にお出でになるという知らせです。

富士の国には「坂折宮」という宮殿があり、そこを預かっていた国守の大山祇命は、たいそう喜んで坂折宮にお出迎えをしたのです。

その夜の宴では舞と、狹名田と呼ばれるいた田んぼのお水で醸造した、天甜酒を出して大君を大いに歓待しました。

その宴席には、大君にこの美酒を注いでご接待をしている、ひとりの

見目麗しい女性がいました。大君は一目惚れをしてしまつて、宴が終わつても離さないのです。抱き寄せて名前を聞いてみると、なんと

大山祇命の娘で、葦津姫というのです。葦津姫も、誉れ高い大君に、まんなざらでもありません。その夜、二人は一夜の契りを結んだのです。



さて、大君は即位式があるので、明朝は急ぎ旅です。たくさんの櫓を立てて、高らかに皇位継承を宣する重要な行事なので、本拠地である伊勢に帰つてしまわれました。

瓊瓊杵尊は伊勢で三種の神器を継承し、皇位継承の大嘗祭を果たされたのですが、日がたつにつれて、葦津姫のことが忘れられません。

恋の想いは止みがたく、居ても立つてもおられません。

「富士の国に行く」と、お布を伝書鳩で飛ばし、その後を船で駿河の港を目指して急がれたのです。

港には仮の宮殿がありますから、葦津姫もお出迎えに急ぎます。お二人は行宮で再会されたのですが、葦津姫は恥ずかしそうに顔を染めて

「あなたの子を身籠りました」と打ち明けました。

「エエ」と大君は驚き、

「それなら、一緒に伊勢に行つて知らせよう」

と喜び勇んで、旅立ちの準備をしたのです。

明日の旅立ちを待つ夜に、密かなたくみが大君に向けられました。

葦津姫が身をもったのだから、この際、容姿はイマイチだが、次の女として「姉の岩永姫どうぞお召し」と、言葉巧みに働きかけたのです。



されど、密屋に送り込まれた岩永姫を見て、大君は、あまりの落差に驚くばかりで、「イヤイヤイヤ」と退けられて、陰謀は首尾に終わってしまいました。

翌朝、大君と葦津姫の、お二人の一行は、伊勢を目指して出立しました。

一行は途中の白子宿でお泊まりになり、大君が一人にられた隙に、

陰謀の片棒を担いでいた下女が、大君に耳打ちをします。

「大君、葦津姫のお腹の子は大君の御種ではないと思います。

あの美貌ですから、国元で以前から言い寄っていた男の種ではないでしょうか・・・」

と陰謀首尾の腹いせに、悪わしの言葉を囁いたのです。

「エエ」

大君の脳裏に疑念が浮かび上がります。

「そういえば、一夜の経験だけで身こもったことになるなあ。

それは確かに不自然でオカシイ。我が王位を脅かすハニラの企みか。

騙されてはなるまい。」

大君は今までの思いを断ち切つて、葦津姫を白子宿に置き去りにして、

その夜半、俄に伊勢に出發してしまいます。

そうとは知らず、翌朝目覚めた葦津姫は、驚いて大君の後を追います。

孤独な旅を進めて、やつと松坂という所に着きましたか、そこには開所があつて、これより先は行つてはならぬと止められてしまっています。

大君一行にも追いつけず、置き去りにされた訳も分らないまま、

身重な体でトボトボと白子宿に引き返すしかありませんでした。

白子宿で、はつと、葦津姫は自分が落とし入れられた事に気付きます。

こうなつてはと、白子宿の桜の木に誓いを立てます。

桜よ、私のお腹の子が大君の子種でないと言うのなら、

桜の花よ、羞んでしまえ。

お腹の子が大君の子種だと言うのなら、

桜の花よ、産む時に咲け。

大君の脳裏に疑念が浮かび上がります。

「そういえば、一夜の経験だけで身こもったことになるなあ。

それは確かに不自然でオカシイ。我が王位を脅かすハニラの企みか。

騙されてはなるまい。」

大君は今までの思いを断ち切つて、葦津姫を白子宿に置き去りにして、

その夜半、俄に伊勢に出發してしまいます。



葦津姫は、もう死のうと覚悟をします。最後に神の前でよう「うけい」のために富士の裾野に出口の無い密屋を建て、周りを崇壇で巡らします。

「疑いが暗れぬなら、母子共々、火で焼け死にます。しかし、

神のご意思が別にあるのなら、火の中から子供達は這い出して生き残るでしょ」

と占じて、密屋に火を放ちます。焔はみるみる燃え上がつて崇壇まで火

が移りました。と、その時、富士山の八つの湖を治めている龍神が飛

来し、たちまち雨を、燃えさかる密屋に吹きかけて、三人の御子と姫とを救つたのです。

救出された四人は、村人によつて坂折宮に送り届けられました。

それでも、矢意の癒えぬ葦津姫は、じつと伏せていました。

大山祇命は、姫の占いの結果を、やはり伊勢の大君にしらせようと村人を使者にたてます。

桜の花は、使者をすつと待つかのうに、咲き続いています。道わされた

使者が向かった伊勢の途中で投擲した白子ではなんと、毒筒外れなのに、

来しました。

臨月になつて、なんと葦津姫は三つ子を産みます。

しかも、その胎児を包んでいる胞衣には、梅と桜と卵の花の模様が浮き出

ていて、男の三つ子でした。これは、瑞光だと、早速、伊勢に知らせた

のですが、何の返事もありません。

事の次第を理解された大君は、暫し熟考されて、正式な使者を葦津姫の元に遣わされました。大君の勅は短冊です。奥津彦命が勅使として乗る龜甲船は、駿河の興津浜に向けて急ぎました。

大君が短冊に書かれた歌は、

藻は、沖の方から浜辺に向かつて寄せて来るのだけれど、

浜に浮く千鳥たちよ、お前達はいいなあ、

そうして愛し合つていて、

私も同じように、愛する姫に寄せて来ているのだけれど、

もつ煮は私と寝所を共にする気はないのだろうか。

この届けられた歌を読んで、葦津姫は恨みが解け落ち、

どつと涙が溢れてきます。心が喜びで震え、もう素足で坂折宮から、

一目散に富士の裾野を走つて、大君の待つ興津浜に会に來たのです。

打ち解けた二人は、仲良く興を並べて坂折宮に帰つて來ました。

諸人は揃つてお出迎えをして、お祝いの言葉を述べたのです。

大君が仰るには、

「そうだ、以前に國々を巡つていた時に、琵琶湖の辺には梅の花が咲い

ていた。次の高島巡幸の時は桜が咲いていて、鵜川巡幸の時は卵の花であ

つた。これは神々が我らの願いをお聞き届け下さつた瑞兆である。



だから、子供達の幼名は梅人、桜木、卯木としよう。そして「桜の誓い」を成就させた葦津姫は、これからは木花之開耶姫と名乗りなさいと仰つたのです。

（フロッグ）
瓊瓊杵尊と木花之開耶姫は、昔し天孫降臨があつた富士の麓に、新しく大きな宮殿を建てられて、仲睦まじく歳を経ちました。

その後、大君は九州統治の為に分かれてお暮らしになりますが、

木花之開耶姫は、ある日、大君に「お別れの日が來ました」と、月に言付

けて、「姪み山」から天上来に旅立たれました。

瓊瓊杵尊は、毎朝、姫が往む方向に折つておられ、その、日に会い合う

日向の「高千穂峯」から、姫を追うように天上来に旅立たれました。

木花之開耶姫が富士の國から帰天された事こそが「姪み山」であつて、

子供が安らかに育つ神様としても、大君が朝の間（午前）に祈られたこ

とからも、「朝間」即ち「浅間」神社に木花之開耶姫は祀られています。

このお二人の秀でた生涯の伝承を、「秀異」と言ひます。

長唄 木花之開耶姫の現代語版として作者記す。

和和三年五月十七日

大中臣正比呂

